



近代
名子
法

四

1加3
998
4



4 嘉
998
4



本朝世事談綺卷之四目錄

○歲時

門

門松

福積

離

住吉極女田極

七夕

東山大文火

十庭

隱希長

力歲

走百病

蓬餅

五月甲

盆

燈籠

ハ本玄松條

節季候

鳥追

紙替

紙鳥

入梅井

六盆

ハ秋

大昨

七十二候



国月

○

文

詩 賦 連 調 行 假 名 平 板 三 筆 世 尊 寺 流 毫 尊 流 本 流

時 鐘 房 門

聯 誹 句 色 紙 真 文 字 蹟 三 上 代 流 堀 近 衛 流

漢和

彼 岸

和 歌 前 短 尺 假 名 韻 語 訓 語 聖 賢 蹟 定 家 流 光 流 志 津 廣 流

畫 圖

土 佐 流 啓 家 畫 探 鳥 羽 繪 藝 河 流 曾 我 流 大 津 流 光 琳 流

金 岡

雪 舟 流 周 文 流 古 法 服 主 馬 秋 月 相 河 流 長 石 流 浮 世 流 ち 流

渡唐像

北 司

職 丹 流 宗 丹 流 永 真 流 永 叔 流 能 阿 流 雪 村 流 松 花 堂 流 一 蝶 流 紅 流

本朝世事談綺卷之四

菊岡沾涼迹



歲時

門松

世讀問答

一条草同

松平を襲ふ所、方代を襲ふ

おれ

くふ者の花の移りて民の心あるを憂ふ

○
力
歲

六十六代一

健虎力

胡亥のころに定基を河に

徳に
 くるを
 國の民と
 毎
 のう
 ち
 あり

子蔵より蔵より彩より定基ハ佛より奇
して横下の源信僧より文を授て一向親氏のそむ
するもなを佛教傳本の因縁を求て所谷の御の
庄司吉宗より文を授て年のはしり集せり
是より事のけり今ふ河のちよりある

○追

彌平の妻成なりある近文のそと河國の長あ
るぬ子那の田圃を物土氏より授て土氏なる武土
にあつて武土なる常より高位より一に二に
九縣の國あつて富より貴より一に二に三に
ねり文を仰く一に二に三月拾り上は年寄の合
せり村の土人蔵育れを長共のあよりけり

所ををさるて一に二に三の教人ありける若と上人
乃身られしより追て文を授て蓋も追て長共の
田圃を物土氏より授て一に二に三の教人ありける
長共の張を寄より一に二に三の教人ありける
なり唄の筆端にせりやえんらのも追て一に二に三の
可代もぬの田圃を物土氏より授て一に二に三の教人ありける
とるへまれある長共の田圃を物土氏より授て一に二に三の教人ありける
健へかろく一に二に三の教人ありける
なり。けりだもよとて一に二に三の教人ありける
ハ子那の田圃を物土氏より授て一に二に三の教人ありける

○摘

世俗に月より摘る事をいねつとて麻を摘る

源氏

枕草子

十にあやうめる人いひつかあやひつあや物をも
さうおとふさうの極る藝ひるあやひつあや

○蓬餅

文法実源云有草俗名母子草二月始生莖葉
白脆每属三月三月婦女採之蒸搗以爲糕傳
爲歲事又云拾列女傳郡母村永沢孝の祖通久
うははらうと云い通久の周情の故あの人し俗を
永澤を先と云い母懐胎の時死く土木の産れと云
なり成長の慶あはれ母の善徳をうけては國通泰
して拾列に至り孝徳を尊建しそ氏を永澤
孝と号その示を母子村といひ永の母子草と糕なり
二月二月を以て歳事しするそむはけするとも

○紙鳶

續博物志云知児、心、湯熱い人なるは湯
の時節その心よく人遇ふし紙鳶をひく
花童児を人せしを年一内熱紙を紙で
病をまじあはれ人たぬなり事物紀原云韓信ひる
あやう紙鳶をひくあやを殺して未央宮の遠近を
量るそあり蘇海集云春の風ハナリそあはれ風ハ
空中に横ひ紙鳶に即ちあやをえたる春の能記
あはれ記すあはれ

○任吉菰田植

源氏物語の任吉位名の菰田をうするのあはれ
は時なるまはれ悪瘡の熱ありて治るそあはれ

吟ひ乳ちいなりおむらふ中かきる大病を
 のれよ、のゝある腹中へて一人の面をさ
 船一葉をさるへてしうて西にせう
 てふ年をへつひる西にせう
 えれいけ例をいれちのせむせむのほ
 又むらじの腹中へて一人の面をさ
 にせうとせうとせうとせうとせうとせうと

○五月甲

光に幸天應元年蒙古の賊を討ちて早良親王を
 討ちて五月五日に神武天皇を
 敗るゝ我々て我々て我々て我々て我々て我々て



○入梅の井

振列矢田郡丹生心田左京野村栗花宿理た爲
年鑑子井あり深う三人深う一人常よりある
梅より入るるに涌きその水の数の入梅
の日を定む流る姓の所て栗花宿理た爲と
五月栗の花の落る時入梅の時なりた爲栗
花宿理と云ふ彼家傳云始祖心田左京野村栗花
名花光丸は号人令中十代廢帝天皇の御宇
奉はと十時横萩た爲長量成の姫白滝姫と云ふ
白滝姫一首をからる
をふもつらぬ栗花宿理た爲のふとて心田男
と云ふつらぬ栗花宿理た爲のふとて心田男

外にさし置きて

山月月の稲葉の末のふとて心田男と云ふ

ふとて心田男と云ふ

ふとて心田男と云ふ

ふとて心田男と云ふ

ふとて心田男と云ふ

ふとて心田男と云ふ

ふとて心田男と云ふ

ふとて心田男と云ふ

○七夕

公事根源云孝德帝天平勝宝七年に乞巧奠
はるるけ事法と云ふなりをなす

○金
 云利根源云天平九年七月始て孟蘭盆を大悟
 乃蔵よりそなりあり孟蘭盆云梵語なり倒懸
 救苦と翻釋に倒懸といふ像の苦をあらわ
 倒懸は懸るるなり救苦は苦を救ふなり
 釋氏要覽云孟蘭盆此釋子由孝報恩
 救苦之要以月一連救母為始梵語孟蘭
 此救倒懸也盆則此方器也矣
 西土をまつる事むい十二月毎日係
 する事ホキ弟の名あふん何れなるかある
 東くあつる事いけい都よりなりをあらわす
 といひたる事ありこそ下略

六盤の事
 二月十五日寅時來 次日午時皈
 五月十五日卯時來 次日巳時皈
 七月十四日卯時來 次日午時皈
 八月十五日辰時來 次日申時皈
 九月十六日未時來 次日申時皈
 十二月晦日午時來 正月朔日卯時皈

○東山大文字

法大昨始て事を仰る澤土寺村慈照寺村上人より
 毎年七月十六日お村の人四百余人松明と燈を聖母に
 送り大と云七月十六日山に入り松明を二三戸に初し日に乾

残りもやうをいふれ強食光明寺にありとて
かゝる津の法ありとて残りまの如し

○本玄結條

接澤園八木村に取北門を築く土を敷代住に毎年の
條を以て個々の清浄の心を養ふ條を以て
樹中四寸長六寸五分深さの管を入る五角の栗を
貼に初めの五日百箇門を以てし中めの五日大丸
村の室中より秋を末の五日切畑村の室中秋を末の五日
切畑村を除くし三種の土を以て京師へてぶきの刻
禁裡へ入るものねを以てし初めの五日に例え年
にかりやと云ふ九十年のあま年將息ありとて不祥お
つるものなりと云ふ例ありと云ふ

○大昨粥 十二月廿四日

俗家赤小豆粥を煮て大昨粥と云ふ氏俗なりと大昨
ともいふ事あるなり此日へ天古智老大師の忌日と

○臘の節

世俗冬至よりいぬのけけ日の節のひくく云々
乃長き方を湯とひけきとて臘と云ふ節の
とて云ふなり又その節の月の一節は云々のあり

○節季候

筑前國観音寺におめや細事ありと云ふ
赤禪を云ひけ遠風し言事と節季候ありとて

○七十二候

日に十二時あり上日に六十時なりと云ふ甲子の二周と

五斗畢て氣假易少九日を一假と云一年二百六十日
五日を以て七十二候となるし三候を一氣と云ふ
十五日二時五刻余し一氣おつ六氣を時と云ふ九十五日余
り時を春夏秋を以て四時と云ふなり

○国月

天の運動三百六十五度四分度一なり是則日の三百六十
日なり一氣三百六十日と云て遇六日を氣盈と云ふ
一年の月小月六つ三六六日四六日の不足と相虚
し云は不足の氣盈朔虚を合せ十二日なり是と
三年積む三千六日の餘日あり三年に一回を以て
又一月三十日ありて六日の不足を以て後五日を
再同なり十九年より七回を以て餘日あり是と一書云

又同ある月の節を以て中を以て節月の元なり
以て中を以て節月の元なり節あり節あり一日二日に中なり
それより節月を以て

○時の隆

時の隆を九つ八つ七つと云ふは陽中の隆
中の陽よりなり節あり日中平刻よりなり是の節は
陰の北あり是陽中の隆なり平の刻よりなり是の節の
中より九時ありと云ふ一刻減して八時七時
なりと云ふし又極子の刻よりなり
乃陽の北あり是陰中の陽なり子の刻よりなり是の
中より九時あり一刻減して八時七時なり是の
中より九時あり一刻減して八時七時なり是の

爲人爲
陰陽

陽の猿の尻を撞。陰の虎の尻を撞たより子の時更の
時をそを算て九つなり。丑の時より八つなり。又午の時（寅
の時より）を算て九つにあたり。はては元據なり。
又説易の豹子撞九を陽より六を陰より子の時と
一陽の始より九を撞ると元陽あり。

○
彼
岸

二月の中を春分とて八月の中を秋分とて昼夜の長短大くおどき時節にてい時日輪天の中道と云く天地溫和乃時宜あれと寺院の静かなるな御廻りて一日の閑をにたりじもあべから



○
詩
賦

天衣天竺三のり大津宮子にちしる性古はる
 達せハ中書王。管神。源順。云任僧虎園禪
 中書又多しと云ふもかへり
 深草僧之改儒惺寓儒宗道春石川丈山墨川通祐
 於波點菴。松永昌三。林春斎。宇執宮曲的木下唯菴
 後及仁斎。松永昌三。林春斎。宇執宮曲的木下唯菴
 乃詩人多し。虎峯といふ也
 聯句
 此の頃始るといふを去るに石聯句の因は遠し
 中書又多しと云ふもかへり

後水尾帝 後西園帝 靈光帝 據
古今集の傳授ハ中古東常縁を以祖トシ宗祇云時
遙實陰云。攝名陰云條云。二光陰實陰云二位主旨
法印ハ條家申陰家鳥丸家お付
堺傳授云ハ宗祇云杜丹花云傳書教院殿云
此云云云宗良傳授云云

連歌

日本武尊乃ふねよりはつばの砂浜を起りて
上古連歌の神より日本武尊を崇む故ありと應安
元年より天満宮を築きし連歌宗匠の如く
市川良基公乃免許を乞ふ侍云常道より
二代目僧人なりと云能河新助。宗祇宗和並我

宗長松州元。宗叔。宗類。新在室代の宗通
 たり其不螻一親當校原か繁高酒井長晴と云
 達人なり周挂紹巴よりきて今の市連秋昨に至
 り誹謗綾錦編集の砌或連秋昨の之を秋宗匠の
 始侍云ふあり宗師なり我のたれと事こゝろ
 やく詮紙よるや怖お遠わはて云ふれとも古来
 より侍云とありてむういかりく系圖の所より侍云
 宗師お下人々尋ね下と疑ひをきりかげり
 頃日歴代の書をみるも宗師の常紙時分の人
 て文脈のころなり侍云ハ應安のころあれど
 元百羊も常の今しあやうきま紀あるといふと
 今めくも解まぬと

○誹諧

好う万葉連歌と云ふも連歌師の業しその中に
 誹諧をぬかぬは伊勢の長官守成宗紙は代の人と云ふ宗理
 に宗理の時も人をもとめて連歌師し御留宗理の
 慶長年中九條政公に連歌龍と云う御免状を
 木下貞法はける負法連歌の法式を規矩にて
 御留の式法をあると云ふ連歌御留二抄なりて貞法
 一人野口左衛門松に重頼系系貞室と云ふ西武北村季
 慈冠井令法に御留様家一雪秋野安静馬河宗時
 末吉道節端氏定重より正由と云ふ宗理に戸ハ
 斎友佐元石田未得高徳と云ふ宗理のけりめなり
 けりとの宗理連人綾子洋なりと云ふと略す

前分

延宝のころは何れも褒美常の所なりと云ふ

冠

元禄八九年に於て京師ありて京師ありて京師あり

冠

元禄八九年に於て京師ありて京師ありて京師あり

○色紙

孝謙天皇より云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

○短尺

床花相國義満公不敗の國分は萬石の時不敗の座
 根板は秋より冬にかけてはびりやうけは
 二月末れと云ふはびりやうけはびりやうけは
 六月末れと云ふはびりやうけはびりやうけは
 九月末れと云ふはびりやうけはびりやうけは
 十二月末れと云ふはびりやうけはびりやうけは

ある字はた大に長く日記の法より其の
の一人は人を去るなりと記し又其の
はすうと云ふ又不破の根根のすい
い極の事なりと云ふなり

梅と云ふなりと云ふなりと云ふなり
いろなりと云ふなりと云ふなり

色紙短尺の寸法ハ二尺五寸五分
平尺

大八寸五分
小八寸五分

長一尺一寸八分
宸筆乃法

湯敷を平の長尺ハ中一寸九分八分
平人の短尺ハ中一寸八分
長一尺一寸五分ハ五分五分

名不水也散

左 人丸
龍門 三室
作心 心
心 心

三行云名

右 黄之
心 心
心 心
心 心

三行云名

心 心
心 心
心 心
心 心

色紙短尺の寸法ハ二尺五寸五分
あり十一、一を記す

定法

長一尺一寸八分
中一寸八分

長一尺一寸八分
中一寸八分

大源唯 水乃
中一寸八分

中一寸八分
左長尺

四行敬

之輪のふも
 ねむむも
 まのあふも
 むもあふも

上下敬

紀友則
 ひふふふ
 人ふふ
 まふふ

四行七連散

大井小大君
 ねふふ
 まふふ
 まふふ



○板行

元久の頃選擇集を板行せし事ありきと云ふに
 わりきと云ふは、その書も板行も、義國の兵火に
 事多しと云ふ、元久の頃の板行は、元久の頃、
 を古くし、上巻の事も、いふべき事、いふべき事、
 ありき、後集の頃の、元久の頃の、ありき、
 ありき、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、
 ありき、と云ふ、と云ふ、と云ふ、と云ふ、

○文新

神代より文字なり、本を割、健をひきて、
 といふ、日本紀纂疏、又古、拾遺、八、序、云、上古之
 世、未有文字、貴賤老少、口口相傳、

三ノ子

五音縱橫相通圖

濁	濁	清
麤	力	阿
サ	力	ア
之	幾	伊
シ	キ	イ
須	久	宇
ス	ク	ウ
世	氣	江
セ	ケ	エ
曾	已	乎
ソ	コ	ヲ
齒音	牙音	喉音
金	木	土

濁	清	濁	清	濁	清	濁	清	濁	清
多	奈	半	末	也	良	和	清	ア	ア
夕	ナ	ハ	ニ	ヤ	ウ	ワ	清	ワ	ワ
千	仁	比	三	伊	利	井	清	ヤ	ヤ
チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	井	清	タ	タ
爪	奴	不	牟	遊	流	宇	清	タ	タ
ツ	ス	フ	ム	ユ	ル	ウ	清	タ	タ
天	子	久	女	江	礼	慧	清	カ	カ
テ	子	ヘ	ノ	エ	レ	エ	清	カ	カ
止	乃	保	毛	興	昌	於	清	カ	カ
ト	ノ	ホ	モ	ヨ	口	才	清	ハ	ハ
舌音	舌音	唇音	唇音	喉音	舌音	喉音	清	ハ	ハ
火	火	水	水	土	火	土	清	ハ	ハ

いふは

士喜笑

10

十

色
藥

雖以
艷之

鼓うり

去
留
遠

我

世
講

講
曾
將

帝

在

有爲乃

與

山
今

今
取
哉

天

淺

夢ゆめ
不ふ

見

醉
毛

不也

西

卷之四

六

漢字を以て
源氏物語の巻を
まづのそ

みちのくかんていせいのきんぎょ

席上歌謡なるを聞きしを

魚用志一 常明の語を文多

通明堂
一石
四十七字
事
是
紅毛

訓
考
文字二十四あり二字あり合て一字と

去合世十八字に通史を瑞林もか
強なる意

五十子ころと。歌徳と云ふ文をいふとてその

解ふは
古文も
勢の
も
所
を
そ
ハ

[illegible][illegible]

世事炎

[illegible]

三
筆

漢成帝

弘法大師

但馬の橘達勢

三
蹟ヤ

小野道風

系議佐理

大納言行成

聖賢セイヤ識シ

弘法大師

小野道風

菅家

世之清流

乃成ての流女なり
 ありあけに能くし

行成

行經

伊房

定實

定信

伊行

伊經

行能

經朝

是時明院及諸家

上代

紀貫之
元和中
毎の祖

定家流

京極キョトキョク・葵門アヱカド・定家卿サダノカサの筆蹟なり

勢嚴流

青蓮院尊親王 伏見の皇子

周祖僧正慈道以來代々筆法子孫一孝人傳

五子傑出

多タ人リ多タ王ヲ
 多タ法リ親シ王ヲ
 多タ朝リ親シ王ヲ
 多タ純リ親シ王ヲ

おのく書達院代々皆其一流あり

近衛流

近衛因白信基一名信基又信尹號三藐院大山

其噴者

三筆と稱すハ
大山公
光悦
昭葉

光悅

較河海之收乎
漢之收洛水
爲率

地を平くして地へ板金候所と勝重の宅地なり

[illegible]

たり家子大虚菴を建てる光收の後に市子葬され
より光收寺といふ日蓮宗なり

滝本流

八幡滝本坊松花堂式部卿昭乗の筆

蹟なり又画圖を善す

堺流

夢菴牡丹花月拍筆蹟し衆列擧に位

志津流

京依く本志津大筆蹟し寛文延宝の頃の人

加賀の社家本甲斐の一人し甲斐は多筆能筆なり

此外通村流二樂流多類流宗祇流宗鑑流傳内流松流

本因王置流僧悦山僧心悦洛は荒本是水紅雲所

君井休哲誓親寺の僧也長壽の道宗松坂井出正水

東都一品公辨宮遠山北湖深定は極新家本相兼佐木

玄龍石川栢山現は岡林竹細井廣澤茶井得水僧東湖

佐木玄山の所書記泉能筆多く書法うつく

○畫圖

姓氏源云二十代雄略帝の時男龍と云く畫派善

日本記云三十二代崇峻帝元年より石瀨國より畫

工白如といふものあり

巨勢金岡中絶言巨勢野足の子本朝は名画なり

清和陽成光孝宇多醍醐の五帝より大絶言

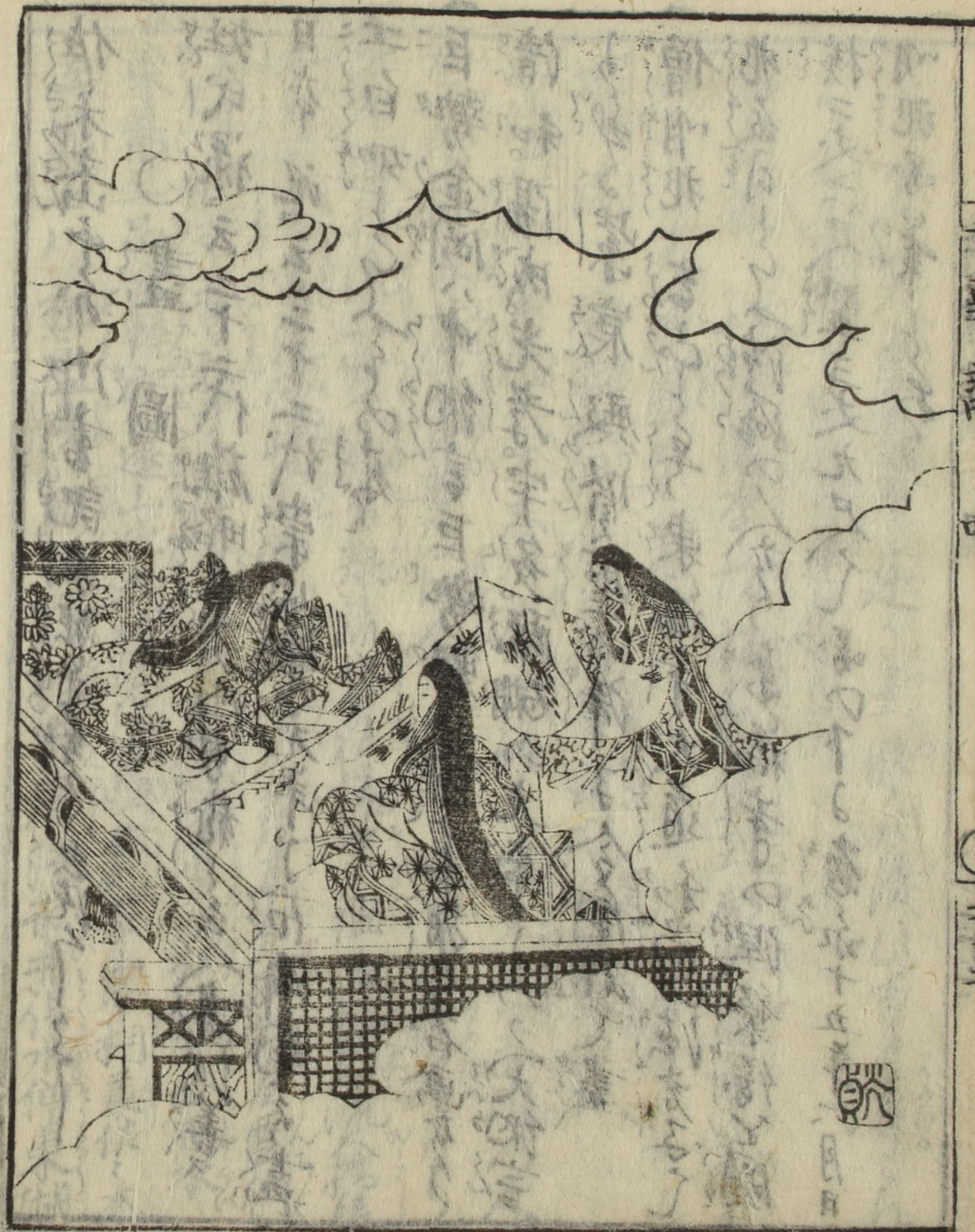
紫宸殿賢聖の降子令國作て畫

僧明兆言く号東福寺大道和尚の法王子

兆友司といふ法路の人なり東福寺の涅槃像を圖

横三丈六尺堅三丈九尺し嵩の下は應永十五年六月日

明兆筆なりとあり



土佐流

土佐光信（後系氏）城家累代土佐氏之
官子位（故）信（信）土佐を以て氏とす

藤原經隆

土佐守從五位下
御繪所之元祖

行光

越前守
延文六年為繪所

光重

越前守
明徳元年為繪所

廣周

土佐守兼彈正忠
永享十一年為繪所

光信

右近將監 任刑部大補 四品
為繪所 倭畫ニライテ此人ヲ以テ妙トス亦連哥達人

光茂

右近將監 任刑部大補 兼土佐守正五位下

和列當麻寺中將姫ノ緣起ヲ画ス風情有餘其規矩ヲ世ニス
土佐光益（土佐）土佐經光（土佐）土佐刑部（土佐）皆裔なり

僧園文 春育と号す相國寺の僧なり如拙は才子
して名画なり雪舟宗丹もその子なり
僧藏舟和尚妙澤和尚お儒も夢窓國師乃法嗣
なり修子ぬを傳へり

啓書記

祥啓と云 鎌倉建長寺の僧し下野の人と云

雪舟流

僧雪舟諱ハ等楊 備後赤松 永元山主

と云 彼中 赤溪の産小田氏の人なり中平相ある
にあり画に如拙周文乃友師もその子なり 寛正年中に
大いに渡り四明天童の夢を嘗みたり 永元と云大僧
乃君臣と云其美を秘せり 洛ハ村路通云
渡唐天神の靈像ハ雪舟より傳へり 雪舟入明の
時明帝雪のつる舟を夢みたり 乃の舟也

乃の舟ハ日本の舟なりと云 而後雪舟明朝至り
その名帝の夢に比して大なる感をも又暇の画作
仙仲化 鶴と云 雪舟舟又見云日本に菅道相
と云人あり也 舟をて日本の聖なりといふを
名を問 化言て昔先年夢中ハ一枝の松を拈る
翁も通し其名ををりし日本に菅道相なりと云
人解尋常はありに教して後才子の事と云畫に
其像を雪舟換へてその舟の画を明朝よりと云
仙仲化と云其の像を雪舟の舟朝（拈る）なりと云
渡唐ハ神像ハけりぬなり菅神唐（渡唐）なり
いれぬと云と云雪舟の舟なりと云 乃の舟ハ
ありと云ハの仙仲化と云雪舟の像路通と云并之

宗丹流

小栗宗丹、周文の弟子し、信長より

中年、相國寺に入り、信長、宗丹上座と稱す

晩年、安のて大法寺より、二十時自牧と号す

小栗宗丹、宗丹の弟子し、後相國寺に入り、信長と

家乃盡、狩野大炊助正信、相列、小栗宗丹の令子、利發

て、祐勢、没し、東の慈照庵、近侍し、画、周文

の弟子し、て、い、通の、好、より、東の、金殿、宗丹

令、一、中を、書し、し、お、あ、り、て、宗丹、死、雪舟

未、ゆ、非、せ、れ、た、その、跡、を、出、僕、人、か、り、後、雪舟

より、より、ゆ、り、宗丹、列、傳、の、津、より、其、家、に、宗

丹、の、弟子、あり、雪舟、其、を、受、て、死、た、り、る、吾、友

小栗宗丹、死、り、誰、人、の、画、より、白、玉、の、目、を、い

將軍、家の、長、指、野、大炊、助、と、云、人の、畫、を、し、る、丹、來、に

ゆ、て、目、金、殿、の、画、宗、丹、今、より、功、修、より、て、死、

其、跡、續、く、の、功、者、な、り、る、旨、を、し、る、指、野、氏、の、子、通、臣、に

中、に、あり、と、云、公、は、日、有、事、を、い、ふ、より、死、す、則、今、に、て、書

す、し、其、筆、法、宗、丹、を、あ、い、ひ、く、一、子、元、信、其、後、

至、る、と、云、天下、画、工、比、長、し、て、法、眼、の、修、り、叙、す

元、信、正、信、の、長、子、し、る、雙、の、妙、術、あり、て、通、より、一、家

を、記、し、る、法、眼、より、より、子、玄、信、又、は、眼、たり、る、より、て

右、法、眼、と、稱、し、て、狩、野、の、宗、と、す、る、亦、書、し、し、二、の

元、信、の、画、より、亦、神、あり、て、和、漢、古、今、比、ぬ、より、

の、中、に、の、ふ、は、元、信、より、大、唯、る、遠、に、鄭、澤、あり、て、い、ふ、

日本、五、百、年、外、此、品、の、あり、事、を、い、ふ、の、因、に、云、

大職冠十二代二階堂遠江守為惠裔
藤原正信

大炊助 剃髮ノ秘勢 又友清作

義政公近習侍

元信

雅名、四郎二郎 始大炊助 任越前守 祝髮永仙
法服 拾古法服 古今ノ名画ナリ

義政公近習、志也 後上京ニ住ス其所ヲ今狩野
中貞狩野家ノ祖ト云 辻子ト云
永祿二己未十月卒ス年八十三

吉信

雅樂助印二朝隱ノ字アリ

祐雪

先テ父卒

季頼

治部少輔

先テ父卒ス

真笑 治部少輔

直信

民部 号松栄
法服

天正年中 卒 歳八十

三男ナレトモ惣領トス

永徳

源四郎
法服

秀吉公ノ時聚樂大坂ニ城ノ大殿金壁ニ畫ク
元信存生ノ内ニ教シム又タクヒナク神皇去カ
天正六庚寅九月先父ニ卒ス年四十八

宗秀

宗也

休伯

光信 右京進
洛相國寺法堂天井蟠龍圖
慶長七三年年四十三

孝信 法服 右近將監
洛東南禪寺法堂天井蟠龍
洛泉涌寺ノ賢聖ヲ画

當時狩野家續レ之

永真 法眼主 右京牧心御安信と云孝信の子
 淡草 孝の天井 蟠龍を画に
 探幽 法印主 宋守信と云孝信の子
 羅山文集 云寛永七唐干御即位の事あり兩使より
 使ひ禁庭より入其儀式を窺ひ畫工狩野守信に
 命を圖せしむるあり自畫の如くし御雲 探信
 探雪等の又なり 東叡山中堂の天井の天人 探信 探雪
 画く。一六堂の十六羅漢 永叔 探信 探雪の三筆なり
 主馬 自適齋 尚信と云孝信の子 探出の才
 是より名画なり 養朴の父し 養朴は法印主 右近又
 青自斎古川常信と云法眼如川 周信 隨川 岑信の
 父なり 今古信 郡信の祖父

永叔 法眼主 信と云右京時信の子 永真の孫
 東叡山中堂 蟠龍を画
 狩野家 松葉直信より技業第一 法家といわれ
 春雪信と云大寺氏信 休山清信 休碩友信等の其
 外名画多し 一六堂の十六羅漢 永叔 探信 探雪の三筆なり
 ぬきとあり 一六堂の十六羅漢 永叔 探信 探雪の三筆なり
 多羽繪 偽正光 獻の書なり 一六堂の十六羅漢 永叔 探信 探雪の三筆なり
 左大臣高直公乃孫なり 天台の座より又三井寺の長史
 一六堂の十六羅漢 永叔 探信 探雪の三筆なり
 一六堂の十六羅漢 永叔 探信 探雪の三筆なり
 僧秋月 諱 等 獻と云薩摩大寺の信に傳へ
 たり 画の雪舟を師とす 一六堂の十六羅漢 永叔 探信 探雪の三筆なり

一 蝶流

吳一蝶、一流を書き、酒矛の面へ、

洞、

野永、

光琳

京尾、

衣

あ、

あ、

女画、

に

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

あ、

